

TJFニュースでは、TJF(国際文化フォーラム)の活動や、事業に関連するさまざまな動きをニュースとしてまとめ、お伝えしていきます。

日中の高校生が共同活動に取り組む 「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」を実施

7月25日(月)～8月3日(水)の10日間、中国吉林省長春市で、中国語を学ぶ日本の高校生のためのプログラム「漢語橋」と、日本語を学ぶ中国の高校生のためのプログラム「日本語橋」を、「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」(以下、サマーキャンプ)として同時に開催しました。日本から90名、中国から46名の高校生が参加し、会場となった長春日章学園高校で一緒に寮生活を送りながら、中国語と日本語を学び、共同活動に取り組みました。

■「使える!」と実感してもらうための授業

このサマーキャンプは、参加者が学んだ中国語と日本語を実際のコミュニケーションで使うこと、そして共同活動を体験することを目的に、プログラムを構成しました。

中国語と日本語を学ぶ授業は、日中の高校生が、お互いに関心のあることについて会話をし、市場での買い物、家庭訪問、公園で市民と交流するときに使える表現を学べる内容にしました。

たとえば、自己紹介の授業では、中国語を使ってオリジナルの名刺づくりに取り組み、教室を動きまわりながら、名刺交換して自己紹介をしました。この名刺は、ルームメイトになった中国の高校生や外出先で出会う人たちにも渡しました。常に話すことが求められる中国語の授業に、1時間目は戸惑いを見せる生徒も少なくありませんでした。しかしすぐに慣れて、毎日食事をつくってくれる学食のスタッフにお礼を言ったり、料理の作りかたを聞いたり、学んだ表



中国の高校生がつくったミニポスター「わたしはこんな人」。

現を使って積極的にコミュニケーションをはかるようになりました。サマーキャンプ後半の買い物体験では市場で粘り強く値切ったり、家庭訪問で「这是我的心意(ささやかな気持ちです)」と言いながらお土産を渡すまでになりました。

日本語の授業では、中国の高校生たちがプロジェクト型の活動に取り組みました。「わたしはこんな人」という自分を紹介するミニポスターをつくり、ルームメイトの日本の高校生に見せて話をしたあと、感想を書いてもらったり、身体を使って自分たちのふるさと(吉林省、長春市、梅河口市)や学校生活を紹介する1分間のCMづくりにチャレンジして、夕食のときに発表したりしました。日本語の授業を担当したある先生は、「サマーキャンプでは目の前に伝える相手がいるので、『日本の高校生のために、自分たち(中国の高校生)がアクションをおこすんだ』というリアリティをもてるのがとてもよかったです。それぞれが、楽しみながら、自分の持ち味をいかして活躍していた」と語っていました。

■日中の高校生で文化祭づくり

サマーキャンプの後半は、日中の高校生が語学力と関係なく、約30



中国語の授業。習った表現を使って買い物の練習。

©大木茂



人ずつ5つの混合クラスに分かれ、クラスごとに「サマキャン☆文化祭」をつくりあげる活動をしました。

「8月2日の13:30～15:30に、日本語を学ぶ長春日章学園高校の1年生を各クラス12人ずつゲストに迎えて『サマキャン☆文化祭』を開催します。主催者として、ゲストが参加できる企画を考え、もてなしましょう」というコンセプトで、各クラスのなかでさらに4グループに分かれ、15分間の企画を行いました。最後にどのグループがいちばんおもしろかったか投票してもらうことにしました。のべ2日間の時間をかけて、グループごとの企画づくり、オープニングからエンディングまでの構成、日中両言語での進行のせりふづくり、会場設営などに取り組みました。途中で、クラス内だけでなく、他クラスのグループともリハーサルを行い、お互いにゲストとして参加してみても気づいたことを伝えあいました。そこで得たアドバイスやアイデアをもとに、ゲストにわかりやすいように説明をつくりなおしたり、楽しい気分になれる雰囲気づくりを考えたりしながら、内容をブラッシュアップしていきました。

ゲストにただ見てもらうのではなく参加してもらうという難しい設定だったにもかかわらず、最終的には、「ドラえもん」の歌で踊りながらいすとりゲーム「まるもりダンスをいっしょに踊る」「日本についての○×クイズ」「手や足を指示されたとおりにシートの色の上に置いていくツイスターゲーム」「福笑いやコマ回しなど伝統遊び体験」と発想豊かな企画が出そろい、ゲストの高校生たちは大変楽しんでいました。

■ 仲間をつないでいく高校生たち

とはいえ、本番までの作業がすべて順調に進んだわけではありません。ことばが十分に通じないなかでどうやって意思疎通をはかっているのか戸惑ったり、酷暑のなか長時間の作業で体力も気力も限界に近づいて、全体のムードが沈滞する時間がどのクラスにもありました。

しかし、そういう状態がしばらく続くと、どのクラスにもお互いを「つなぐ」役をする生徒たちが現れました。たとえば、中国語のレベルでは入門や初級の生徒たちが、中国の高校生にとってわかりやすい日本語を工夫し、実際に物を使って例を示しはじめました。ところどころで



ゲストを迎えて文化祭本番。いすとりゲームは大盛り上がり。
©大木茂



「明白了吗?(わかる?)」など簡単な中国語を使って、一生懸命自分たちの考えていることを伝えようとします。中国語はつたなくても、かれらの表情や声のトーン、前のめりの体勢など、全身から、相手のことを思って伝えたいという熱意や真摯さがあふれているので、聞いている中国の生徒たちにも「理解したい」という気持ちが湧きおこり、自然に巻き込まれて、積極的に企画づくりに関わるようになっていきました。また、日本語や中国語が中級レベルの生徒たちも、さりげなく通訳に入るなど、必要な場面でフォローする光景が各クラスで見られました。

■ 「コミュニケーションの引き出しが増えた」

サマキャンが終わりに近づくと、「まだ帰りたくない」「このメンバーがいい! 別れたくない」「滞在をもっと延ばしてほしい!」と訴える声を多く聞きました。文化祭を終えた夜の歓送会では、日中の高校生136名全員が肩を組みながら「让我们荡起双桨(漕ぎだそう!)」とレミオロメンの「3月9

市場で買い物。安くしてもらえないか交渉中。
©大木茂

日」を熱唱し、涙を流しながら別れを惜しんでいました。帰国した日本の高校生たちに感想を聞くと、「中国の子ってどこが違うのって聞かれるけど、違いがあんまりわからなくて意外だった」「今まで何のために外国語を勉強しているかわからなかったけど、それがわかった気がする。将来は、中国かオーストラリアに留学したい」「文化祭で本当に交流したって感じがする。相手が言ってる中国語がわからないときに紙に書いてもらったり、中国語で伝えられないときに相手がわかるジェスチャーを考えて使ったり。いろんな方法で相手に伝えようと格闘しているうちに、コミュニケーションの引き出しが増えた気がする。今は、地元で日本語があまり話せない人に出会っても、話せるぞって思う」と語ってくれました。サマーキャンプで経験したことが、それぞれの生徒にどういった変化をもたらしたのか、かれらが学校に戻って少し時間がたった頃からインタビューを始める予定です。

(室中直美)

「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」

漢語橋(日本で中国語を学ぶ高校生のためのプログラム)

主催: 中国国家漢弁

実施: TJF

受け入れ機関: 長春日章学園高校

助成: 双日国際交流財団

協力: 文部科学省

後援: 外務省

特別協力: ANA

日本語橋(中国で日本語を学ぶ高校生のためのプログラム)

主催: 吉林省教育学院、TJF

助成: 国際交流基金北京日本文化センター、双日国際交流財団

高校の中国語・韓国語教育関連事業

2011年高等学校中国語韓国語 教師研修を開催

TJFは、7月30日(土)から8月3日(水)の日程で、「2011年高等学校中国語韓国語教師研修」を桜美林大学と共催しました。この研修は、在日本中国大使館教育処、駐日韓国大使館韓国文化院、駐日韓国文化院世宗学堂の特別共催、文部科学省の後援、高等学校中国語教育研究会、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワークの協力を得て、国民生活センターと桜美林大学プラネット淵野辺キャンパス/PFC(いずれも神奈川県相模原市)において開催されました。

2009年度に始まったこの事業は、外国語教育とはどうあるべきかを参加者が考えた上で、『学習のめやす2011—高校からの中国語・韓国語—』が提案する外国語教育の内容と方法を理解し、それぞれの実践につなげることをめざしてきました。昨年、一昨年と同様、今回も全5日間の日程のうち、前半2日間は中国語と韓国語に限らず、外国語教育に携わる教師全般を対象としました。今年はこの前半のプログラムに、初参加者のためのクラスと、研修経験者を対象とするクラスを設けました。後半3日間は、中国語と韓国語の教師を対象とするプログラムを設定しました。

■「学習のめやす」のキーコンセプトを考える

初参加者、研修経験者どちらのクラスにおいても、「学習のめやす」が今年度中に完成することに先駆けて、ダイジェスト版冊子を発表しました。これは、TJFが高校・大学の教師といっしょに研究開発を進めてきた「学習のめやす」の教育理念と教育目標、学習目標などを抜粋してまとめたものです。

初参加者対象のクラスでは、主任講師である當作靖彦氏(米国カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)が、学習者にコミュニケーション能力を身につけさせる外国語教育のあり方と、それを達成するための具体的な目標設定から学習内容と方法、カリキュラムデザイン、レッスンプラン、学習者中心の教室活動に関する講義を行った後、「学習のめやす」を紹介しました。

研修経験者に向けたクラスでは、最初の時間に「学習のめやす」の概要を提示した後、授業実践を見たいというかねてからの要望に応え、日本の高校における中国語と韓国語の授業風景を撮影したビデオと、米国高校の日本語の授業で生徒が課題として制作したビデオを「学習のめやす」のキーコンセプトに基づいてグループで分析しました。この作業を通じて、キーコンセプトに対する理解を深めるとともに、自分たちの授業を内省することをめざしました。

■「学習のめやす」を踏まえて教科書を活用

8月1日からの中国語教師と韓国語教師を対象を限定した研修は、会場を桜美林大学PFCに移し、中韓それぞれのグループに分かれて、普段授業で使っている教科書の特徴をワークショップ形式で分析する活動から始まりました。

「ここまで詳細な教科書分析をするのは初めてだったが、自分の使っている教科書の特徴がよくわかった」という参加者の声を受けながら、さらに、分析した教科書を「学習のめやす」の考え方に基づいていかに活用するかを考えるテキストブックアダプテーションを行いました。語彙や文法の授業に終始するのではなく、どうしたら既存の教科書を用いても、他者と協働して社会活動を実現する生



テキストブックアダプテーションについて熱のこもった講義をする當作先生

徒の力を育むことができるかをテーマに、実際の授業づくりに取り組み、その結果をポスター形式で発表して、意見交換を行いました。

「学習のめやす」を活用した授業実践について、もっとも身近な素材である教科書の分析や、その活用方法をテーマにグループワークを行ったことで理解が深まり、多くの参加者から、「学習のめやす」の考え方で、自分が使っている教科書を活用してみたいという声が寄せられました。

■ 今後の研修に向けて

今年度末に発行する冊子『学習のめやす2011—高校からの中国語と韓国語—』には、「学習のめやす」が提案する外国語教育のための授業づくりの方法を多数掲載します。これまでの3回の研修で、その一部をテーマとして取り上げてきました。来年度以降は、評価など参加者のニーズの高いテーマも取り上げていきたいと思っています。また、一人でも多くの方に参加してもらうために、小規模なワークショップを各地で行うことも検討しています。(中野敦)

国内の外国語教育関連の事業

外国語教育関係者を対象とする シンポジウムを開催

中国語、韓国語をはじめ多様な外国語教育関係者が多数参加する機会に外国語教育について意見を交換する場を設けたいと考え、教師研修プログラムの一環として、7月31日(日)に、ミニシンポジウムを開催することにしました。「21世紀の日本の外国語教育を考える」と題して開かれたシンポジウムの会場となった国民生活センターの講堂は、中・韓・英・仏・独・露・西・日の各言語の教育に携わる約120名の人びとで埋まりました。

まず、国内の高校における外国語教育現場の声として、「学習のめやす」作成プロジェクトメンバーで、中国語教師の藤井達也氏(埼玉県立伊奈学園総合高等学校教諭)と韓国語教育に携わっている山下誠氏(神奈川県立鶴見総合高等学校教諭)から、「学習のめやす」は生徒の学びのあり方を変える可能性があるとの報告がありました。

続いて、小笠原藤子氏(慶応義塾大学SFC、湘南藤沢高等部講師、ドイツ語)、櫻木千尋氏(カリタス女子中学高等学校教諭、フランス語)、小田

晴巳氏(神奈川県立国際高等学校教諭、スペイン語)からは、コミュニケーションを主体としたことばの学びの重要性について、それぞれの考えが述べられました。

これを受け、「学習のめやす」の監修者でもある當作靖彦氏から、米国では外国語教育は非常に弱い立場にあり、外国語教育の推進には、その重要性を訴え、政治家、産業界、一般市民の支持や協力を得るという、アドボカシーが必要であること、全米外国語教育協議会(ACTFL)がアドボカシーに重要な役割を果たしていることが紹介されました。また、日本にもACTFLのような組織の設立が望まれるとの提言もありました。続いて、松本茂氏(立教大学教授)が、日本の外国語(英語)教育政策の現状と課題について報告しました。

フロアとの質疑応答では、ロシア語や言語政策の研究者から、多様な外国語教育の選択肢を確保すべきだとの声が上がりました。

今回のシンポジウムは時間も限られており、フロアからの意見や提言について議論を深めるにはいたりませんでした。2012年3月にTJFが開催するシンポジウムで議論を深めていきたいと思えます。

(中野敦)

日本の中国語教育関連事業

長春で中国語教師研修を開催

文部科学省、中国教育部、中国国家漢弁、TJFが共催する「日本の高校中国語教師のための研修」、通称「長春研修」の8回めが、7月24日(日)から8月5日(金)まで、吉林大学(中国長春市)で実施されました。今年度は、東日本大震災が発生したため募集の時期が例年より1ヵ月ほど遅く4月にずれ込み、その影響もあってか、応募者は20名の定員枠に対して、公募10名と中国国家漢弁のウェブサイト上での公募による任意参加1名、計11名の参加にとどまりました。

ここ数年の応募状況を考慮し、中国側共催者と協議して、今年度は初参加者優先としながらも、これまでのリピーターも対象としました。さらに、高校の現場で多くのネイティブ講師が活躍している状況を踏まえ、外国籍でも日本の永住権を取得している人であれば参加できるようにしました。実際に、リピーター4名と日本における永住権を取得している中国籍教師2名が参加しました。

研修カリキュラムにはこれまでどおり、外国語としての中国語教育の専門家による授業のほか、長春市の歴史に関する講座と関連建造物の見学、長春市内の高校訪問と日本語履修生徒との交流など、教室外の活動も組み込まれました。しかし、悪天候のため現地のフライトスケジュールが乱れ、1日遅れの開講を余儀なくされたた

国家汉办国外汉语教师来华研修项目 吉林大学2011年日本高中汉语教师研修班成果发表会



日中国際結婚の寸劇の最後にみんなで合唱。

め、予定していた中国人家庭の訪問は中止となりました。また、中国側共催者の要望により、今年にはHSK(漢語水平考試)などの中国語能力試験の説明や最新の中国語教材の紹介にも一部時間をあてました。

研修生からは、おおむね研修内容に満足した、大きな収穫があったとの声が寄せられています。特にマンツーマンの発音矯正や市内に出かけての実物教材探し、日中国際結婚の披露宴をオリジナルの寸劇にした学習発表会など、日本ではできない経験を、中国語教師としてのレベルアップも図ることができました。また、約2週間の共同生活のなかで、参加者同士の結束が固められ、日本の高校中国語教師のネットワークがさらに広がったことも、研修の成果といえます。

参加した教師からは研修の意義が深く認められているものの、本研修は、2009年度より参加者の定員割れが続いています。これまでに全中国語教師の4分の1にあたる累計130名の参加者があったことから、中国研修を希望する教師の絶対数が減少したとが一因として考えられます。一方、メールやウェブ等で広く参加を呼びかけていますが、募集情報や研修の存在そのものが依然として現場の教師に届いていないケースが往々にしてあります。地方行政機関や学校のさまざまな制約が参加を阻んでいる状況など、応募者減少には複数の原因も考えられます。TJFとしては来年度の実施に向けて、原因を検証し、応募者が増加するよう準備を進めていきたいと考えています。

(長江春子)

海外の日本語教育関連事業

日本語を学ぶ生徒と日本語教師のための「好朋友ウェブサイト」オープン

日本や日本語について楽しく学べるサイトをオープンします。このサイトは、TJFが大連教育学院と共同で制作した中国の中学校向け日本語教材『好朋友ともだち』に掲載した、ストーリーマンガ「大連物語」を中心に、以下のコーナーで構成されています。コーナーのほとんどは、日本語と中国語が切り替えられるようになっています。

①大連物語:『好朋友ともだち』の、横浜から大連の中学校に転校してきた主人公と友だちの友情物語を描いたストーリーマンガ「大連物語」の第1巻分20ページを掲載しています。マンガのせりふはすべて音声で聞くことができます。

②Enjoy! マンガ!: マンガ「大連物語」の背景にある日本の文化や学校生活に関する話題を写真を使いながら紹介しています。

③世界の中高生に会おう!: 写真や動画、文章で、中国だけでなく、世界各国で日本語を学んでいる中高校生の素顔を紹介しています。日本の中学生も登場します。

④かんたん日本Go!: マンガ「大連物語」に出てくる日本語の挨拶や自分の気持ちを相手に伝えるための簡単な表現を学べるコーナーです。

⑤先生たちの『好朋友』:『好朋友ともだち』の教師用指導書や授業案などの関連資料、教師研修「好朋友ワークショップ」に関する情報などを掲載しています。

今後も少しずつコンテンツを増やし、日本語学習者や日本語教師に限らず、訪れた人が日本に関心を持ち、日本語を学ぶ楽しさを感じてもらえるようなサイトにしたいと思っています。ぜひご覧ください。

▶ www.tjf.or.jp/haopengyou

(森本雄心)

米国ウィスコンシン州の日本語教育を支援

メナーシャ合同学区に寄付金を贈呈

7月18日の夕方、ウィスコンシン州メナーシャ高校の講堂で「Japanese TAIKO drumming」が開催されました。メナーシャ合同学区の住民約100名は、初めて聴く和太鼓の迫力ある音に圧倒されていました。和太鼓を演奏したのは、ウィスコンシン州の姉妹県である千葉県のある二つの太鼓グループ、木更津「飛翔太鼓」の13名と銚子「跳ね太鼓」の12名で、中学生から60代までの男女で構成されています。

合同学区では米国でも数少ない、幼稚園から高校まで一貫した日本語教育が行われています。今後も日本語教育を維持し、さらに発展させていくためには、教育行政関係者のイニシアティブ、日本語教育関係者の努力に加えて、学区に住んでいる人びとのサポートが不可欠です。より多くの人びとに直接日本文化に触れてもらうという今回の太鼓公演の趣旨にTJFは賛同し実施に協力しました。

Menasha Japanese program gets boost

\$50,000 given for language instruction

By Michael King
Menasha, Wis. — With both the United States and the world looking for ways to improve the quality of education, the Menasha Japanese program in Menasha, Wis., is getting a boost from a grant of \$50,000 given to the program by the Menasha Joint School District's unique Japanese program.



Check Outmen Elementary School principal Tammy Ralston (left) and Menasha High School principal Kathy Kishimoto during a program to honor Menasha High School. A group of Japanese students performed for an audience there. The program is supported by a \$50,000 donation to the Menasha Joint School District's unique Japanese program.

地元紙「THE POST-CRESCENT」(2011.7.19付)に掲載された記事。

飛翔太鼓の演奏に続いて、メナージャ市のドナルド・マークス市長およびメナージャ合同学区のコビルスキ教育長臨席のもと、同学区の日本語教育の維持・発展を願って、TJFより寄付金 (Sawako Noma Memorial Endowment

「野間佐和子記念寄付」を贈呈しました。この寄付を決定した背景には、外国語教育を通じて子どもたちに「21世紀を生きる力」をつけさせるために、充実した日本語教育を継続していきたい、学区の子どもたちと日本の子どもたちを交流させたいというコビルスキ教育長の考えが、TJFが現在取り組んでいる事業の目標に合致していることなどがありました。寄付は今回を含め3年度にわたって行うことになっています。

同学区ではこの寄付金を、小・中・高校の日本語教師3名が中心となって実施する、日本語・日本文化を体験する遠足や日本語学習者を拡大するためのオンライン日本語教育プログラムの開発などに投じていく予定です。TJFは、学区の要望に応じて、それぞれの事業の実施に協力していきたいと考えています。(水口景子)

日本語教育関連事業 東日本大震災の被災者に思いを 寄せた日本語のクラス活動

東日本大震災発生以来、海外の小中高校における日本語クラスで、募金活動や子どもたちが被災者を想い、自分たちにできることを考えるクラス活動が多く行われています。

『好朋友ともだち』で日本語を学んでいる中国の中学生たちは、自分たちの思いを届けるために鶴を折り、その羽に日本語と中国語で励ましのことばを書きました。『好朋友』で、日本人は願いごとをするときに鶴を折ることが紹介されていたのです。大連の中学校で始まった活動は、吉林省や黒龍江省の学校にも広がり、TJFに計6校から千羽を超える鶴が届きました。

『好朋友』制作チームの一人が気仙沼市の中学校を卒業していることから、同市に受け入れを打診したところ、「この震災で気仙沼の子どもたちはいろいろな我慢を強いられた状況にあるので、同年代の中国の仲間の励ましが大きな力になる」との返事をもらいました。そこで、10月19日に折り鶴を菅原茂気仙沼市長に手渡しました。お礼のビデオメッセージは、「いつか気仙沼の子どもたちと会ったらぜひ日本語で話してください。それまで日本語の勉強を頑張ってください。

ださい。気仙沼の子どもたちにも中国のことをもっと知ってもらいたと思います」と結ばれていました。鶴を手にした気仙沼の子どもたちの気持ちを中国の中学生に届け、心と心をつなげるのがTJFの次の仕事です。

TJFは、これまでに寄せられた先生方のメッセージやアイデアを掲載したブログを開設しています。多くの方々に見ていただければ幸いです。また、皆さまの取り組みをぜひお知らせください。

▶ <http://link.tjf.or.jp/thk1j> (水口景子)



大連から届いた折り鶴

2011年7月・8月・9月 実施事業一覧

- 『国際文化フォーラム通信』第91号を発行[7月]
- 第4回「漢語橋」世界中高生中国語コンテスト東日本予選大会 (在日本中国大使館教育処主催)に協力[7月/東京]
- メナージャ合同学区に寄付金を贈呈[7月/米国メナージャ市]
- 「高校生のための中国語講座」(桜美林大学孔子学院主催)に協力[7月/神奈川]
- 平成23年度高等学校中国語担当教員研修を共催[7~8月/中国長春市]
- 2011年高等学校中国語韓国語教師研修/2011年外国語担当教員セミナーを共催[7~8月/神奈川]
- ミニシンポジウム「21世紀の日本の外国語教育を考える」を主催[7月/神奈川]
- 「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」を実施[7~8月/中国長春市、北京市]
- 「事業報告2010-2011」日本語版・英語版・中国語版を発行[8月]
- 『学習のめやす2011—高校からの中国語・韓国語—』ダイジェスト版を発行[9月]
- 『Takarabako』No.29を発行[9月]
- 『ひだまり』第48号を発行[9月]
- 拓殖大学第一高等学校が課外授業として実施する「韓国語講座」に協力[9~12月/東京]
- 「中高校生のための韓国語講座2011」を共催[9月~2012年3月/東京]

お知らせ

海外からも作品を募集中! 締め切り間近!

第33回よみうり写真大賞高校生部門「フォト&エッセーの部」では、国内外の高校生からの作品を募集しています。受賞作品は読売新聞に掲載され、TJFのウェブサイトでも公開します。日本の人たちに自分の作品を見てほしい、世界の人たちに自分の大切な友だちを紹介したい、そんな思いをもっている高校生に、ぜひこのコンテストをご紹介します。

応募資格 2011年4月現在、日本および海外の高等学校またはそれに準ずる学校に在学している方

応募作品 ひとりの高校生(自分自身を除く)を主人公とした、2～5枚の写真と文章(200字程度)

締め切り 2011年11月20日

発表 2012年1月中旬

詳細は、<http://www.tjf.or.jp/thewayweare2/jp/> をご覧ください。

高校生のための中国語土曜講座を開いています

TJFはISI国際学院(新宿区)と共催で、「学んでみよう中国語」講座(資料代1000円)を10月から毎週土曜日に開講し、15名が参加しています。全10回の講座で、家族や友だち、好きなことなど自己紹介するのに必要な中国語を学ぶほか、中国文化体験ワークショップでは、中国のジャグリングを体験します。最終回には、中国公演が話題になったSMAPの「世界に一つだけの花」を中国語で歌ったり、ISIで日本語を学んでいる中国の留学生と交流したりする催しを予定しています。

この講座に参加した高校生は、中国語を学ぶ生徒を対象とする短期中国研修「漢語橋:日本の高校生サマーキャンプ」(2012年実施予定)に応募することができます。TJFは、中国語の授業がない学校の高校生に中国語に少しでもふれてもらい、中国語の世界に入るきっかけにもらえたらと願っています。

新書『であい、つながる』を発行しました

TJFが公益財団法人に移行したことを記念して、広報資料として新書を刊行しました。TJFが事業で出会った人びとを7つのエピソードを通して紹介しています。TJFは「ことばと文化」をキーワードにさまざまな事業を行っていますが、「ことば」の力を改めて考えてみました。人が新しいことばとであうとき、何が始まるのでしょうか。ことばを学ぶことで、何を発見し、何を考え、何をを得るのでしょうか。エピソードにこれらの答えがちりばめられています。ぜひ一読ください。

本書をご希望の方は、件名を「新書希望」として、お名前、所属、住所、電話番号を記したメールを forum@tjf.or.jp までお送りください。先着100名の方にお贈りいたします。

情報誌からウェブサイトへ

TJFは、中文情報誌『ひだまり』(1999年創刊、1,900部発行)と英文情報誌『Takarabako』(2004年創刊、6,000部発行)を年4回発行し、海外の日本語教育や日本理解教育に取り組む先生に無料で送付してきました。両誌では、いま日本で話題になっていることを取り上げ、その背景や経緯、世界とのつながりなどの面から紹介するとともに、メディアがあまり伝えていない中高校生の素顔も伝えてきました。これらの情報に対するニーズはまだまだ高いことから、インターネットが普及し、海外にいてもすぐに情報を入手できるようになった現状に合わせた情報提供を行うことにしました。両誌は9月発行の第48号、No.29をもって休刊し、今後はウェブサイト「くりにっぽん」に力を注ぎ、動画などウェブサイトならではの情報を発信していきます。

休刊を機に、両誌に掲載した日本事情に関する記事をトピックごとに分類し、E-bookにまとめています。「I. 暮らし」「II. 楽しむ」「III. 社会・教育」の3冊で構成し、第1冊には「ファストフード」「お弁当」「お花見」、第2冊には「鉄道」「ゲーム」「書道」、第3冊には「携帯電話」「ロボット」などの記事を掲載します。

「くりにっぽん」のメールマガジンに登録していただいた方には、E-bookが掲載されているURLをお知らせします。みなさまの登録をお待ちしています。

<http://link.tjf.or.jp/MMCJP>

●身近にいる人に考えていることや気持ちを伝えたいと思って外国語を学び始める人は少なくないと思う。学んだ外国語を使って、隣にいる人とつながることができたと実感する人も多いだろう。その対象となる外国語は、人によってさまざまであるにもかかわらず、今の日本は、多様な外国語を学ぶ環境が保障されているとはいえない。TJFが、中国語と韓国語を「隣語」と呼び、まず、若い人たちが「隣語」を学ぶ環境づくりに取り組んできたのは、今や日本国内では、中国語話者や韓国語話者と日常的に隣り合って暮らしており、コミュニケーションのために必要なことばだと考えるからである。日本語との関係が最も強く、日本語や日本を見つめなおす鏡となることも大きな理由だ。

●若い人たちが「隣語」を学ぶことを通して、英語と比較するだけでは見えない視点を獲得し、ことばを学ぶ楽しさを味わうことができる。今号で紹介した「学習のめやす2011」は、そう確信する先生方とともに作り上げた。中国語と韓国語教育から始まった作業ではあるが、米国の日本語教育、日本の国際理解教育や情報教育の専門家参加も得て、隣語教育の枠にとどまらない提案をしたという自負がある。「今、作っているのは言語教育の『めやす』ですが、その精神は新学習指導要領に貫かれている、『習得

した知識技能を活用して課題を探索する』という学びのあり方を、さらに発展させる可能性があるという意味で、後期中等教育いや学校教育に広く普遍性をもつのではないかと、あるメンバーは語っている。

●「学習のめやす」を家づくりに例えれば、家そのものの概念と、設計から工法まで、家づくりのマニュアルを提案したことになるだろうか。今年度内にオープン予定のウェブサイトでは、モデルハウスやモデルルーム(授業実践例)、家づくりに必要な部材や内装のための素材(表現、語彙などの言語材料、文化事象などの学習内容例)を住宅展示場のように並べたコーナーも用意している。いずれも、そこに暮らす人たちのことを熟知した大工がさまざまな工夫をして作った力作である。まずは、いろいろな家や部屋をのぞいて、「学習のめやす」の考えを取り入れた外国語教育とはどんなものかを見ていただければ嬉しい。

●TJFはこれまで「心を通わせるためのことばの学び合い」や「人と人をつなぐ文化理解」をめざしてきた。それらを包括している「学習のめやす」は、我々の事業の拠り所でもある。この完成を一つのスタート地点として、世界の子どものための「つながりの実現」に向けて着実な一歩を進めていきたい。
水口金子

編集後記

国際文化フォーラム通信92号

2011年10月

発行人 内藤裕之
編集人 水口金子
アートディレクション 鈴木一誌
デザイン+DTPオペレーション 大河原哲
出力・印刷・製本 凸版印刷(株)
校閲・校正 天山舎
表紙写真 大木茂

公益財団法人 国際文化フォーラム

〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル3階
Phone: 03-5981-5226
Fax: 03-5981-5227
E-mail: forum@tjf.or.jp
www.tjf.or.jp/